
和夫

江頭道糞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

和夫

【Nコード】

N9959I

【作者名】

江頭道糞

【あらすじ】

戦争と人間。そして生きること

まず初めは人生は非常に楽観的だったんだ、和夫はそう思う。確かに日本経済は最悪だった。だから和男は21世紀に学生運動なんかしようとしたのだ。セクトに入りたいという係の男が出てきた。

「じゃあなるべく遠隔地でやるんだ。分かったな？ おれはこっそりお前をつけている」男はそう言って去った。やれやれ、やっかいなもんだ学生運動に参入しようというのも、なにしろ受験科目が万引きだもんな。和男は暖かい日にバスで隣町まで行った。男の姿はない。目的地はスーパーマーケット。和男はいつしか根岸崇一の「ラズベリーキッス」を口ずさみながらスーパーマーケットに向かった。そのの味もきつとラズベリー。和夫は店内をぐるりと一周して文房具売り場を目をつけた。シャープペンシルを二本とってこっそり一本内ポケットに入れる。残りの一本はどうどと買った。和夫はだれにも見つからずに万引を終えた。「やるじゃねえか」男が声をかけてきた。なるほど車で後をつけてきたのか。「乗るか？ 送るぜ」「ありがとうございます。革命万歳」「革命万歳」やれやれ、ラズベリーキッスはしばらく歌えそうにない。

そしてデモ、ビラ、看板。

和夫が革命に敗れてからも、彼の人生は続いた。和夫はコネで職につき体制に従った。

髪を短く切ってというかほとんど丸坊主だった。

和夫には家族がなかった。彼女ができたけどすぐに別れた。宮台真司が昔いつていた。Z会のアンケートで彼女ができるのは小学校時代に母親と親密な関係にある例が多いと。和夫にはそれ以来彼女はできなかった。いい年になって孤独死は嫌だな、と和夫は思った。ちょうどそのころ新聞には身寄りのない子供たちを引き取りませんか？ と広告が出ていた。経済不振でやたらと子供が捨てられてい

た。

和夫の家に来た男の子、吉雄は八歳だった。それから二年間、和夫にとってはおそるべく幸せな日々が続いた。初めは二人とも気まぐずだった。でも吉雄はよく学校でいじめられて泣いて帰ってきた。和夫はそのたびによく自分自身の話をした。子供の頃俺もよくいじめられていたよ。大きくなるとどうでも良くなるよ。それにね、大人になったらいじめられない奴なんかない。仕事ってもんはきついもんだからね。そうだ空手の道場に通ってみないか？ 格闘家でいじめられていた人はいっぱいいるよ。そして「はじめの一步」と「ホーリーランド」を買ってやった。吉雄はそれをむさぼるように読み、極真空手の道場に通った。よく和夫は空手の実験台にされた。子供の力でもちよつと痛かったが、そのスキップでお互いの絆は深まった。吉雄は大いに変わった。始めはいじめっ子に仕返しをしてもすぐに返り討ちにあったがそのうち互角に戦うようになり、いじめられなくなった。

でも戦争がはじまった。中国との泥沼の戦いだ。世界経済がむちゃくちゃで、しかも尖閣諸島、歴史問題で対立した自衛隊の仮想敵国中国とついに戦争がはじまったのだ。アメリカは中立の立場をとり、手を出さなかった。中国は核で脅して食糧輸入ルートを断ち切り兵糧攻めにしたので食糧自給率の低い日本はお手上げだった。国内で飢餓が深刻化した。なにも食うものがなくなり、人間が人間を食べた。人肉はウサギと言われた。昔、僧侶がウサギを鶏肉だと言って食べたもじりだった。和夫は吉雄のために家財道具を売り払ってウサギを買ったが、それでもウサギも足りず、二人はいつも空腹だった。

ある日のこと、吉雄がおなかが痛いと言った。すぐに虫垂炎だとわかり、手術したが医者も食糧不足でふらふらだった。お粗末な手術となり吉雄は腹膜炎を起こして死んだ。和夫は泣き叫び、ふざけるなど医者に飛びかかったが、取り押さえられ、吉雄はウサギにされ

てしまった。骨も残さずスープにされ、和夫は吉雄を永遠に失った。日本は戦争に敗れ、尖閣諸島を失い多額の賠償金を払った。日本は徐々に戦争から立ち直った。

老人になってから和夫が覚えたこと、まず左足から腿の半場まで両足をきつくもむ。両足が終わったら両手ももむ。乾いた皮膚の硬さが和夫の歳を物語っている。その上和夫は末期がんなのだ。両手をもんだら、百湯を飲む。小便する。こうすると足にたまった排泄物が流され、全身の病気が完治するのだそうだ。中国から伝わる民間療法で民間療法で、効果が出るのは三ヶ月。和夫の余命も三ヶ月。さて宗教は何にしようか？ 和夫は思うのである。彼は今まで信仰をもったことはない。仏教でいうところの断見、つまり死んだら何も残らないという考えだった。だけでもものは試し、宗教というのを信じてみて死後の世界があつたらうれしいじゃないか。イスラム教がいいよな。死後は永遠の若さ、決して酔いつぶれない極上の酒と何度性交しても処女に戻る美女だらけのハーレム、花も咲き乱れているだろう。まさに極楽だ。そこまで考えて和夫は笑った。ろくでもない人生だった。戦争で人を喰い。吉雄も喰われた。そこまで生きて何になるのだろう？ とりあえず痛み止めのモルヒネはよく効いている。丁度晴れているし散歩に出ることにしようか。屋上と病院の庭とどちらがいいだろう？ 屋上にしよう。屋上でイスラム式の棺桶を考えてみよう。

屋上で自殺寸前の奴とかいらないかな、と和夫は思ったが、いない。和夫は少し笑った。一斉にはためく洗濯物の群れ、眩しくて目をそむけたくなるシーツの白さ、死んだら真っ白なのか？ いやそれすらないんだらうな。無の無。白の白だ。和夫は屋上の柵の所に行き、イスラム式の棺桶って何だ？ と下を見て考えた。コーランを買ってみようか？ 死ぬまでに読めるのかな。ハハ、くだらない、本当にくだらない人生だった。若いころに自殺しても、今は全然後悔はない。何もない。和夫は死の決断を下した。

しかし、柵を越え飛び降りようとする と 棘のささる 感覚がした。
死にたいと思う ヤマアラシ が 生きたい という ヤマアラシ と一メートル
はある 棘を刺しながら 身を寄せ合う ような。くそ、まだ 生きたい
？ それは 何故？ 和夫は 屋上の床に 転がり 血を吐いた。 生きたい
のか？ 俺？ じゃあ、生きろ。 生きろよ 俺エ！ 和夫は 叫んでい
た。彼の 心臓が止まった 後も。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9959i/>

和夫

2011年10月6日08時47分発行